

5. 八日市遺跡の道路跡について

(1) 八日市遺跡の古代道路跡

八日市遺跡西地区から道路跡2ヶ所とそれに伴う側溝がそれぞれ検出された。

第1号道路跡は調査区の東側で検出された。硬化面は古墳時代後期の第8・12号住居跡の埋没後に構築しており、全長16.2m、最大幅が約4.8mであった。直線を維持しながら南南東から北北西方向に走行し、非常に堅固で中央部分がやや高かった。

側溝は東西両端に検出されたが、後世に幾度となく掘り返されていたため道路跡に伴うものを明確にすることは困難であった。そのため、検出された硬化面の幅がそのまま当時の道路跡の幅であるかどうかも不確定である。第15号溝の覆土最上層には浅間A軽石層が認められている。

硬化面上には浅間B軽石層が認められ、砂礫と共に良く踏み固められていた。中央部分には波板状の痕跡が検出された。幅0.72~1.90m、長さが約11.5mで、調査区外に延びていた。

第2号道路跡は調査区の西端で検出され、西側の側溝は調査区外にかかるため調査はできなかった。東側の側溝の土層堆積状態から、数度の整備・縮小が行われていたようである。

硬化面は全長17.2m、幅が約4.1mで、第1号道路跡と同様に中央部分がやや高くなるものと思われる。走行方向は南からほぼ真北を向く。全体的に凹凸が著しく、砂礫・粘土で踏み固められていた。路肩部分には砂礫、中央部分には粘土が充填されている。粘土部分には小ピットを伴う浅い落ち込みが確認された。

その下にはもう一面の硬化面が検出され、柵列と考えられる小ピットが1列確認された。ピットはほぼ一直線に並び、覆土断面には柱穴の痕跡が認められた。

側溝は東側に3条の溝が検出された。道路構築段階には第45号溝が伴い、第47号溝がそれに続き、廃絶段階のものでは第46号溝が相当する。第45・46号溝の覆土上層からは浅間B軽石層が認められ、当時においては側溝としての機能を失っていたことが考えられる。

(2) 県内で検出された古代の道路跡

d. 所沢市東の上遺跡 (第221・223図)

遺跡は武蔵野台地上に島状に突出する狭山丘陵の東側末端の八国山を南に臨む位置に立地する。丘陵直下には柳瀬川が流れ、遺跡の南で北東に流れを変えたのち荒川に合流している。

第36次調査で検出された道路跡は、全長が約100mで、両側に幅・深さ約1mの側溝を伴い、両側溝間心々距離が約12mであった。硬化面は幅3~5mで、波板状の痕跡が確認されている。

出土遺物等から、築造時期は7世紀第3四半期で、廃絶されたのが9世紀代と考えられている。

e. 川越市女堀II遺跡 (第221・223図)

本遺跡は、入間川と小河川である小畔川が合流する地点の狭い入間台地上に位置する。周辺には弥生~平安時代にわたる大規模集落である霞ヶ関遺跡など、弥生時代後期以降の遺跡が数多く知られる。

16世紀前半以前と考えられる幅8~9m、深さ約3m、全長420mの直線的な堀が検出されている。女堀と呼ばれるその堀の東側の土壘の下から、古代道路跡の東側溝と考えられる溝が検出された。群馬県境町の例が示すように、堀は西側溝であったものが後世に灌漑用水路として新たに掘削されたものであると考えられている。古代道路跡の側溝であった場合には、道路跡の硬化面の幅は10~12mで、東の上遺跡で検出されたものと類似する。

n. 熊谷市横間栗遺跡 (第222・223図)

遺跡は、利根川によって形成された沖積地である妻沼低地の自然堤防上に位置し、八日市遺跡から東に約4km、南東約2.7kmには式内社の奈良神社がある。

検出された道路状遺構は古墳時代に属する可能性が高いとされ、他に古墳時代の遺構としては前期の住居跡1軒、後期の溝7条が検出されている。

硬化面については確認されていないが、波板状の痕跡が検出されており、浅い溝状遺構の両側にピットがほぼ直線的に並んでいる。遺物は出土していない。

(3) 第1・2号道路跡の年代

道路跡から出土した遺物はほとんどなかった。出土した土器も小片であり、時期を判別できるものは皆無に等しい。実測可能であったのは第172図に示した須恵器甕の底部破片のみである。

1は硬化面上から出土しているが、第1号道路跡に伴うものかは判断しかねる。2は東側溝である第45号溝の覆土から出土した。何れも末野産である。

2点ともにおおよそ9世紀代と思われる。然しながら須恵器は小破片であり、また出土位置を正確におさえることができなかつたため、道路跡の時期をこれらの土器だけで決定することは困難である。

次に、検出された遺構の配置及び重複関係から古代道路跡の時期を考えてみたい。

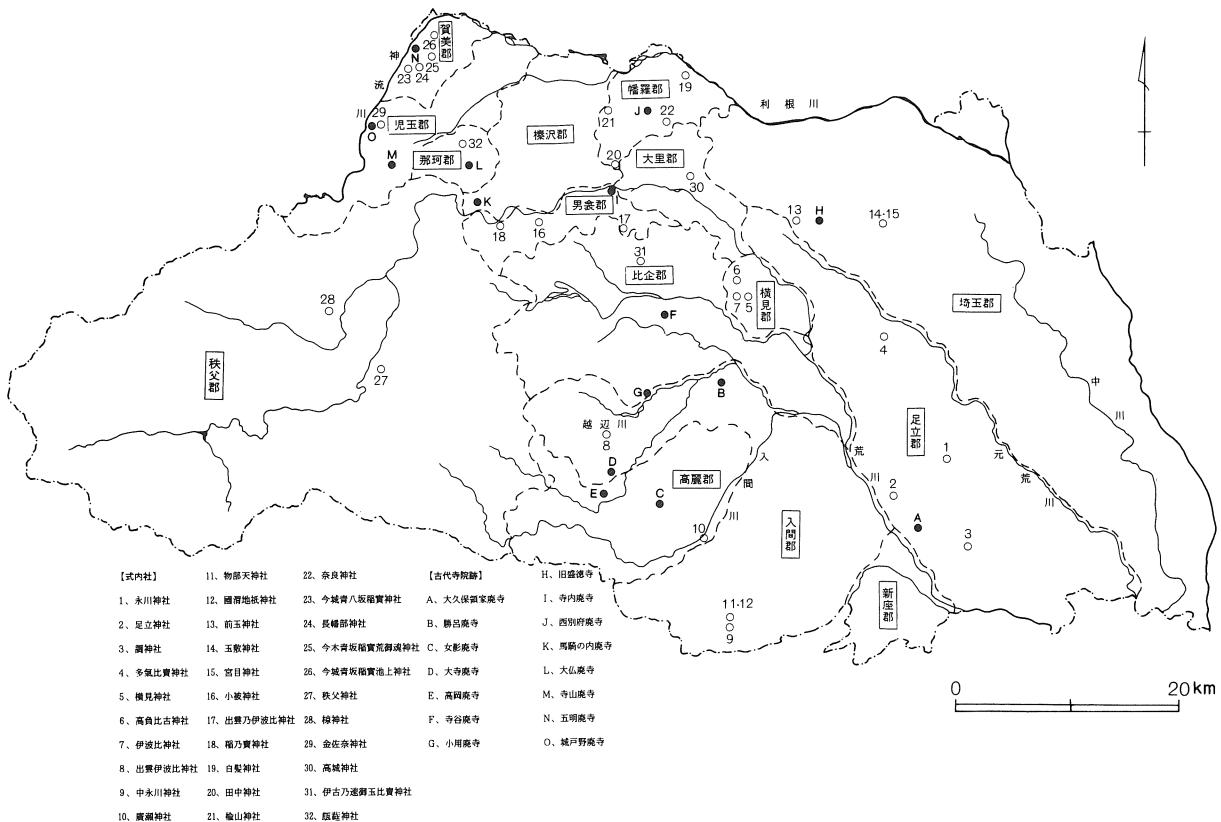
第1号道路跡は、硬化面が古墳時代後期の住居跡上に構築されており、第8・12号住居跡とも6世紀前半を下らないものと考えられる。そのことから築造時期は、住居跡の埋没期間を考慮に入れて、6世紀後半か

ら7世紀前半以降と考えられる。廃絶時期は、硬化面を覆う砂礫に浅間B軽石層が認められることから、天仁元(1108)年以降の12世紀前半代が与えられる。

第2号道路跡については、他の遺構との重複関係がまったくない。そのため、道路跡周辺の遺構の配置などから時期を考えてみたい。

本遺構の東側には帶金具(蛇尾)を出土した第18号住居跡など7世紀後半から8世紀前半にかけての住居跡8軒が集中している。古墳時代後期6世紀前半の住居跡は第11号住居跡が最も近接するものである。このことから住居跡の配置を考えた場合、本道路跡の築造時期は7世紀後半の前後の時期と考えられる。道路跡が先に築造されたのであつたのなら、7世紀第3四半期を与えても良く、そうなると東の上遺跡で検出されたものとほぼ同時期に築造されたことになる。廃絶時期は、東側溝である第45・46号溝の覆土上層から検出された浅間B軽石層から、第1号道路跡と同様の12世紀前半代が与えられる。

第220図 埼玉県式内社・古代寺院跡分布図



第221図 道路跡関連の主な遺跡(1)



- | | |
|-----------|----------|
| a、武藏国府推定地 | f、霞ヶ関遺跡 |
| b、武藏国分寺跡 | g、若葉台遺跡 |
| c、將軍塚 | h、山田遺跡 |
| d、東の上遺跡 | i、宮町遺跡 |
| e、女堀II遺跡 | j、南比企窓跡群 |

式内社・古代寺院跡の記号は第220図に同じ

(4) 第1・2号道路跡と東山道武藏路

前項で述べた東の上遺跡と女堀II遺跡で検出された古代の道路跡は、東山道武藏路と推定されている。

東山道武藏路とは、武藏国が東山道から東海道に所属替えとなる宝亀二(771)年以前の国府へと通じる官道である。本項では八日市遺跡で検出された古代道路跡と東山道武藏路との関係について考えてみたい。

東山道の所属替えについての記述は『続日本紀』宝亀二(771)年10月己卯(27日)条に次のように書かれている。

「太政官奏す。武藏国は山道に属すと雖も、兼ねて海道を承く。公使繁多にして祇供堪へ難し。其の東山の駅路は上野国新田駅より下野国足利駅に達す。此れ便道なり。而るに枉げて上野国邑楽郡より五ヶ駅を経て武藏国に到り、事畢って去る日、又同道を取りて下野国に向ふ。今東海道は相模国夷參駅より下総国に達す。その間四駅にして往還便近なり。而るに此を去り彼に就くこと損害極めて多し。臣等商量するに東山道を改めて東海道に属せば、公私所を得て人馬息することあらんと。奏可す。」

東山道武藏路のルートについては木本(1992)や酒井(1993)が推定しており、両氏ともほぼ同一ルートを考えている。そのルートとは、武藏国府—東の上遺跡—鎌倉街道堀兼道—(入間川)—女堀II遺跡—勝呂廃寺—(荒川)—奈良神社—妻沼町台—(利根川)—新田駅・足利駅を結ぶラインとなる。

以上のルートであったと仮定した場合、本遺跡で検出された古代道路跡はルートから西に約4kmずれていることになる。そのことから東山道武藏路の支道としての可能性が考えられる。地図を眺めると、東山道武藏路のルートと考えられている東松山市古凍(k)から分岐し、7世紀前半に位置付けられる寺谷廃寺(F)、式内社伊古乃速御玉比賣神社(31)、出雲乃伊波比神社(17)、最盛期が9世紀後半と考えられ「大里郡」と書かれた平瓦が出土した寺内廃寺(I)、そして荒川を渡河した地点には式内社田中神社(20)、さらに楡山神社(21)を抜け、群馬県伊勢崎に向かうほぼ一直線の道路

が認められる(第221・222図)。この道路に沿って古代の寺院跡・式内社が並ぶことから、古代道路跡の名残りとして考えることも可能であろう。

また陸上交通の重要な問題として、利根川を渡河する際には、近世にその利用が確認されている高島の渡しを使っていたであろうことが推測される。

(5)まとめ

以上のことから、八日市遺跡で検出された2本の古代道路跡は、おおよそ同時期に利用されていたことが考えられる。そのルートは、古代寺院跡・式内社が沿道に並ぶ東松山古凍(郡衙推定地)ー上野国佐位駅間と推定した。現時点においては、本ルート上には古代道路跡が検出されてはいないが、これから調査で発見される可能性が考えられる。荒川の北には標高77mの残丘状の小丘陵である観音山、さらに群馬県に目を向ければ標高1,828mの赤城山がほぼ正面に見渡すことができる。これらの山は、直線的な道路を計画・敷設するためには絶交の目標物であったに違いない。

推定したルートが、東山道武藏路そのものなのか、あるいはその支道であるのかは、後者の可能性がかなり高い。それでは何故この道が必要になったのであろうか。宝亀二年以前の時代に東山道を利用するにあたっては、上野国新田駅なり下野国足利駅に出て武藏国府に向かったものと思われる。しかし、国府に向かうために推定したルートを利用した場合には、新田駅を利用したよりも約6~7km程の近道になる。現代のように自動車でも利用すれば10分弱の距離でも、当時の人々にとってはとても長く感じられたことであろう。以上のことから、本遺跡で検出された古代道路跡の敷設目的は、武藏国府に向かうためのショートカット(近道)と考えられる。

最後に、筆者の浅学のため道路跡が2ヶ所検出された問題点、道路の構造、古代の交通制度などについても十分な考察を加えることができなかつたことを反省したい。今後の古代道路跡調査の成果を踏まえて、改めて稿を草したい。

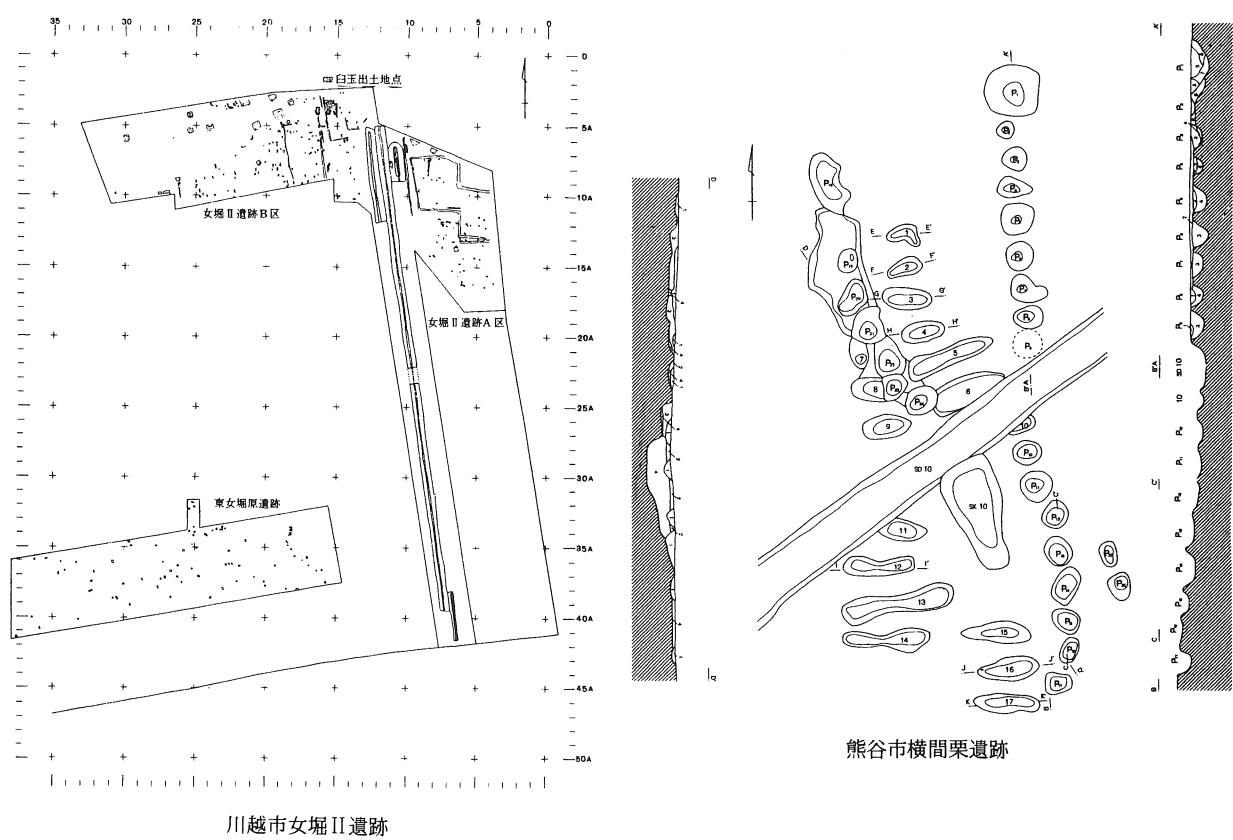
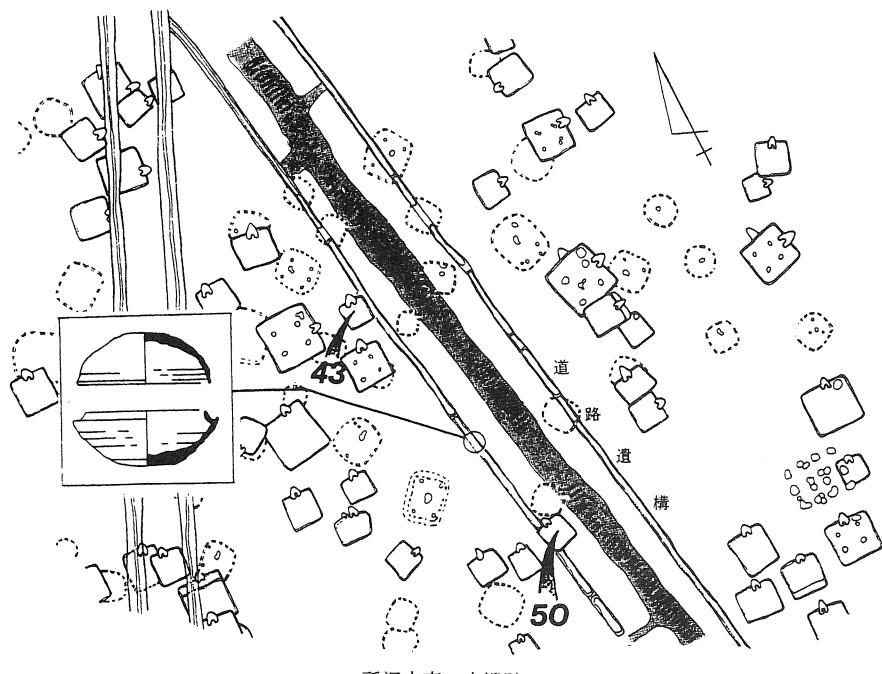
第222図 道路跡関連の主な遺跡(2)



- | | |
|---------------|----------|
| k、古凍(比企郡衙推定地) | q、下新田遺跡 |
| l、山王裏遺跡 | r、市宿通遺跡 |
| m、大谷瓦窯跡 | s、大東遺跡 |
| n、横間栗遺跡 | t、矢ノ原遺跡 |
| o、寺井廃寺 | u、十三宝塚遺跡 |
| p、下原宿遺跡 | |

式内社・古代寺院跡の記号は第220図と同じ

第223図 道路跡集成図



引用・参考文献

- 赤熊浩一 1988 『将監塚・古井戸 一歴史時代編II一』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集
- 飯田充晴・柏谷吉一 1990 「所沢市東の上遺跡の調査」『第23回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会他
- 飯田充晴 1994 「埼玉県東の上遺跡の道路遺構」『季刊考古学』第46号 雄山閣
- 磯崎 一 1985 『新田裏・明戸東・原遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第85集
- 伊藤廉倫・小宮俊久 1992 『下新田遺跡』 山武考古学研究所
- 井上尚明 1986 『将監塚・古井戸 一古墳・歴史時代編I一』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集
- 井上尚明 1994 『光山遺跡群』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第137集
- 岩瀬 譲 1991 『樋詰・砂田前』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第102集
- 岩瀬 譲 1995 『前・居立』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第151集
- 大屋道則 1994 『清水上遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第152集
- 小笠原好彦 1990 『勢多唐橋 橋にみる古代史』 六興出版
- 岡本健一・西井幸雄・金子直行 1993 『谷津・二反田・下向山』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第131集
- 小野義信 1987 『女堀II・東女堀原』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第68集
- 川口 潤 1989 『本郷前東遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第78集
- 木戸春夫 1995 『根絡・横間栗・関下』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第153集
- 木下 良 1985 「古代の地域計画の基準線としての道路」『交通史研究』第14号 交通史研究会
- 木下 良 1990 「日本古代道の道幅と構造 一発掘の成果から一」『交通史研究』第24号 交通史研究会
- 木下 良 1992 「下新田遺跡で検出された古代道路の性格について」『下新田遺跡』 山武考古学研究所
- 木本雅康 1992 「宝亀2年以前の東山道武藏路について」『古代交通研究』創刊号 古代交通研究会
- 黒坂禎二 1989 『上組II』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第80集
- 黒坂禎二 1995 『向山／上原／向原』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第155集
- 劍持和夫 1993 『ウツギ内・砂田・柳町』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第126集
- 劍持和夫 1995 『森下・戸森松原・起会』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第148集
- 古池晋禄 1992 『根岸遺跡』 深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第34集
- 木暮仁一・須田 茂 1984 「上野国新田駅とその周辺の東山道について」『群馬県史研究』19 群馬県史編さん委員会
- 小島弘義 1986 「古代相模国出土の墨書き土器」『國學院大學考古学資料館紀要』第2輯
- 埼玉県 1931 『埼玉縣史』第2巻 奈良平安時代
- 埼玉県県史編さん室 1982 『埼玉県古代寺院跡調査報告書』
- 埼玉県立歴史資料館 1987 『埼玉の古代窯業調査報告書』
- 酒井清治 1993 「武藏国内の東山道について 一特に古代遺跡との関連から一」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集 国立歴史民俗博物館
- 坂井 隆 1989 「東山道・あずま道を中心とする道路遺構の考古学的特徴 一上野地方の陸上交通史序論一」『研究紀要』6 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 坂爪久純・小宮俊久 1992 「古代上野国における道路遺構について」『古代交通研究』創刊号 古代交通研究会
- 佐藤美智男 1979 「五箇駅地名説の再検討 一古代東山道の一問題一」『交通史研究』第四号 交通史研究会
- 澤出晃越 1985 『上敷免遺跡(第2次) 上敷免北遺跡』 深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集
- 早田 勉 1991 「浅間火山の生い立ち」『佐久考古通信』No.53 佐久考古学会

- 高橋 学 1986 「秋田県内出土の墨書き土器集成」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第1号
- 瀧瀬芳之 1990 『東川端遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第94集
- 瀧瀬芳之・山本 靖 1993 『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集
- 田名網宏 1969 『古代の交通』 吉川弘文館
- 田中広明 1992 『新屋敷東・本郷前東』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第111集
- 田中広明 1995 「関東西部における律令制成立までの土器様相と歴史的動向 一群馬・埼玉県を中心にしてー」『東国土器研究』第4号 東国土器研究会
- 西口壽生 1993 「飛鳥・藤原宮跡の墨書き土器」『月刊文化財』11月号 文化庁文化財保護部
- 西口正純 1994 『矢島南遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第149集
- 芳賀善次郎 1978 『旧鎌倉街道 探索の旅』上道編 さきたま双書
- 服部敬史 1995 「東国における古墳時代須恵器生産の特質」『東国土器研究』第4号 東国土器研究会
- 平川 南 1991 「墨書き土器とその字形—古代村落における文字の実相—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集 国立歴史民俗博物館
- 平川 南 1993 「土器に記された文字」『月刊文化財』11月号 文化庁文化財保護部
- 堀口万吉・角田史雄・町田明夫・昼間 明 1985 「埼玉県深谷バイパス遺跡で発見された古代の“噴砂”について」『埼玉大学教養部紀要 (自然科学篇)』第21巻
- 堀口万吉 1986 「埼玉県北部でみられる古代の噴砂について」『歴史地震』第2号 東京大学地震研究所
- 村田章人 1993 『原ヶ谷戸・滝下』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第127集
- 森田 悅 1988 『古代の武藏』 吉川弘文館
- 森田 悅 1992 『古代東国と大和政権』 新人物往来社
- 山川守男 1995 『城北遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第150集
- 吉沢幹夫 1984 「宮城県出土の墨書き土器について」『東北歴史資料館研究紀要』第10巻